

らない。

〔質問〕岩沢武彦（札幌通信）：1）アミノ配糖体系薬剤による聴器毒性の程度は、動物実験でプロベニシッドなどの投与で腎機能を低下させた場合、著しい差異がみられるか。2）アミノ配糖体系薬剤は化膿性中耳炎に対して局所的に点耳・耳浴する場合、注射で使用するより聴器毒性がつよく出る危険性があるかどうか。実験的証左があれば教示下さい。

〔応答〕秋吉正豊（東医歯大）：1）一侧の腎をとつたものでは聴器毒性がつよく出る。ともかく腎の排泄機能は大事な問題である。viomycin など腎毒性と聴器毒性両方がある物質ではとくに注意が必要である。2）慢性中耳炎の時、粘膜の変化がかなり関係する。ただし粘膜が肥厚して正円窓膜を透過しないとはいきれない。症例、症例によって注意が必要である

う。

〔追加〕山本 馨（阪市大）：ハーバード大学の標本をみると、正円窓膜のところに円形細胞浸潤のある時期がある。その時期には透過する可能性も考えられる。結合繊維化すれば通らなくなるのではないか。

〔質問〕市川銀一郎（順大）：ラセン靭帯、血管条などをきれいに分けるテクニックを教示下さい。

〔応答〕中田穂出美（東医歯大）：はじめ apex より骨包を静かにラセン靭帯と分けるように剥がすと、ラセン靭帯が側頭骨側にくつつき、骨包だけ破れて剥がれる。つぎにラセン靭帯を針で刺して廻しながら剥がせばとれる。それから靭帯部をとりはずし、スライドグラス上に置き corti 部を2本の針を用いて切りとる。

抗生物質による皮膚炎

粟 田 口 省 吾*

最近、小児の上気道・下気道・中耳・扁桃などの急性ないし亜急性疾患に対して、テトラサイクリン系抗生物質レダマイシン（demethyl-chlortetracycline：DMCT）を投与、そのうちの数例に、sunburn 型（ヒヤケ）皮膚炎をおこしたものがあつたので、その概要を報告する。

投与患者の年齢性別： 年齢は8～5才、男子4名、女子5名計9例で小学生が8名であつた。

症状： 鼻漏・鼻閉・咳嗽・咽頭痛・耳痛などを主訴とし、特に高熱のものはなく、通学可能な程度なものばかりであつたが、冬期降雪の季節であり、いずれも毎日局所治療のため通院することは困難な地区のものばかりで、もつぱら薬剤服用などの自宅療法で症状の寛解をはかることが最良の方法と考えられた。

投与薬剤： まず急性ないし亜急性症状を速かに消滅させるために、DMCT 1日 450～600 mg 投与、さらに消炎酵素剤（ダーゼンまたはノイチューム 1日 3カプセル併用、1週間分処方し、含嗽剤を与え、おのおの投薬のきれた1週間目に来院し症状を観察するこ

ととした。

経過：

(1) DMCT, 1日 450 mg (150×3) 投与例：1週間連続投与2例は、いずれも症状は軽快したが、うち1例（6才男子、副鼻腔気管支炎）は投与中止後3日目に顔面にヒヤケ様の軽い皮膚炎が出来た。2週間連続投与2例もいずれもその鼻漏・咳嗽・耳漏は止んだが、うち1例は投薬中止後3日目に顔面皮膚炎をみた。4週間投与例1例（6才女子、急性中耳炎・皮膚炎・副鼻腔炎）は、2週目ごろに顔面皮膚炎が出来たが、鼻漏・耳漏は軽快しなかつたために投与を継続し、4週間後に前記症状は軽快、投与を中止した。その間皮膚炎は増悪せず、投与中止後間もなく消滅した。

(2) DMCT, 1日 600 mg (150 mg×4) 投与例：1週間連続投与した4例のうち、2例（8才女子）は中耳炎、耳管カタルの症状は軽快し、副作用はなかつた。他の2例のうち1例（8才男子、扁桃炎・副鼻腔炎）は投与開始後に軽い嘔気あり、鼻漏・咽頭痛は連

* 弘前大学医学部耳鼻咽喉科学教室

続服用により軽快した。投与中止後、10日目に顔面、手背に皮膚炎が出来たが間もなく消褪した。また残りの1例（8才女子）は耳管狭窄や鼻漏の症状は減褪したが、約1週間後に顔面皮膚炎が出来たが、漸次消褪した。

一般に抗生物質の副作用としての皮膚炎は制癌剤として用いられるブレオマイシンなど、あるいはペニシリン系、アミノ配糖系などの抗生物質でもときには薬疹としてみられることもある。今回の報告はテトラサイクリン系のもので、いわゆる光線過敏症によるもので、ヒヤケ型（sunburn型）を呈した。テトラサイクリン系抗生物質のうちで、最も光感作性のもはこのDMCTであると言われており、本剤は比較的多量に皮膚・爪甲・歯などに結着しやすい傾向がある。従って中波長の紫外線が通りやすい部位に蓄積され、一層光過敏症を起こしやすい。特に本症の発生が、降雪の最も多い時期にみられたことも注目すべきである。なお色々な投与条件により投与されたが、皮膚炎を起

こしたものは、必ずしも本剤投与量の多寡または投与期間とは関係なかった。また皮膚炎の発生は投与開始後10日前後にみられたものが多かった。なお併用した消炎酵素剤は特に皮膚炎発生と関連があるとは思われなかった。

〔追加〕岩沢武彦（札幌通信）：OTCの経口投与で皮膚発疹をきたした2例を経験している。アレルギー反応発現には薬剤の蛋白結合率が関連していると思われる。蛋白結合率が高いものにはMFI-PCやdesa-cetyl化されやすいCEG、CEX、TC系のDOTC、MINOなどがある。

〔質問〕山本 馨（阪市大）：痒みや痛みなどの臨床症状はあつたか。

〔応答〕栗田口省吾（弘大）：この9例中1例だけに胃症状として嘔気があつたが、他にはなかつた。雪が降っていて紫外線が非常に強かつたことが関係しているようであつた。